

幼児期以降の体験と家庭環境が現在の 学習・生活に与える影響についての研究

水野 考

(2008年10月2日受理)

Effect of Infant Experience and Family Culture on Student's Study and Life at Home

Kou Mizuno

Abstract: This study examines the influence of infant experience and family culture on student's study and life at home in elementary students. A total of 1,644 fifth-grade elementary students were asked to fill in questionnaires concerning study and life at home and school. Factor analyses revealed four major factors in study and life at home: (1) study at home, (2) concern for literature except studies (3) life at home, and (4) independent lifestyle. In addition, each factor was analyzed by multiple regression analysis. The study revealed that student's study and life were influenced by infant experience and home's culture. Family culture have more effect on student's study and life than infant experience.

Key words: infant experience, family culture, study and life at home

キーワード：幼児期の体験、家庭の文化、家庭での学習・生活

1. 問題の所在

本研究の目的は、幼児期の体験や家庭環境と現在の学習・生活との関係について分析することである。

社会学及び教育社会学研究において、家庭環境が学力教育達成に大きな影響を与えているということが明らかになっている。コールマン (1966) のあと、アメリカで多くの研究が行われるとともに、ブルデュー (1970)、バーンステイン (1971)、ポウルズ (1976) など、多くの再生産論研究が蓄積された。

我が国においても、それらに触発された多くの研究がある。ブルデューに基づき文化のヒエラルヒーに注目した宮島・藤田編 (1991) や階層間格差に注目した苅谷・志水編 (2004)、耳塚 (2007)、マイノリティ問題に注目した池田 (2000)、原田編 (2003) などである。これらの研究では、親の学歴、収入、職業、文化的活動などといった家庭環境変数が、学力に対して影響を与えていることを、調査に基づき実証的に明らかにしている。

本研究では、家庭の環境変数の中でも特に文化的な側面に着目し、児童の学習・生活習慣への影響を捉えていく。特に保護者が幼児期の児童に行った働きかけの影響に着目したい。なぜなら、幼児期の経験は、その後の人格形成や学習・生活習慣の基礎となっていると考えることができるからである。もし、幼児期の体験、家庭の文化、家の人の働きかけ、の3変数と児童の学習・生活との関係を分析した結果、幼児期の体験との関わりが強ければ、保護者が、積極的に幼児期に働きかけを行う必要を指摘することができるし、また、反対に家庭の文化や、児童への働きかけとの関わりが強ければ、保護者が、自らの普段の振る舞いを省みる必要を指摘できるであろう。

そこで本研究では、データを収集するために用いた質問紙調査の概要を述べた後、第1に幼児期の体験、家庭の文化的環境、家庭での学習・生活習慣について現状を把握する。第2に、児童の学習・生活習慣の傾向をよりわかりやすく把握するために主成分分析を行い、情報の集約を試みる。第3に、学習・生活習慣の

規定要因を、幼児期の体験、家庭の文化的環境（家庭の文化、家の人の働きかけ）の観点から分析を行う。第4に、これらの観点によって、学習・生活習慣がどのように規定されているのか検討を行う。

2. 調査の概要と回答者の属性

2005年11月に広島県、北海道、沖縄県、島根県4道県の公立小中学校に直接、または市町村教育委員会を通して、質問紙を送付した。調査の対象とした学年は、ある程度質問紙を理解できるような年代であることを考慮し、小学校高学年である5年生と、中学校2年生を選択した。2006年3月までに郵送により回収された有効回答者数は、児童1,664名、生徒1,720名である。本論文では、小さな頃から小学校2年生くらいまでの経験と、現在の学習・生活習慣の関係を分析するため、小さな頃の事をより正確に覚えていると考えられる小学校5年生を分析対象とした。

表1 児童の属性

		度数	%	
性別	男	828	51.0	
	女	795	49.0	
	合計	1623	100.0	
家族構成	親	どちらも一緒に生活していない	31	2.7
		どちらかと一緒に生活している	189	16.6
		両方とも一緒に生活している	918	80.7
	合計	1138	100.0	
	兄弟	一人っ子	159	14.0
		兄弟あり	979	86.0
合計		1138	100.0	

児童の属性を表1に示す。性別では、男子828名(51.0%)、女子795名(49.0%)である。また、家族構成の項目は、家で一緒に生活している人に丸をつけてもらった結果である。親の項目では、両方とも一緒に生活していると回答したものが918名(80.7%)と最も多いながらも、どちらかと一緒に生活している、もしくはどちらも一緒に生活していない者も約1/4がいることがわかる。次に、兄弟の項目では、159名(14.0%)の者が一人っ子であることがわかる。

3. 幼児期以降の体験、家庭環境、家庭での学習・生活習慣

ここでは、児童の幼児体験や家庭環境、学習・生活習慣の状況を確かめる。表2は、それぞれの項目について児童が「よくあてはまる」「すこしあてはまる」と回答していたら「あてはまる」に、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」と回答してい

たら「あてはまらない」に再カテゴリー化したものである。

①幼児体験

まず勉強に関する項目についてみていく。「勉強を教えてくれた」では、82.2%の児童があてはまると回答しており、ほとんどの児童が勉強を教えてもらった経験を持っていることがわかる。対して「参考書をそろえてくれた」「図鑑をそろえてくれた」では、約6割の者があてはまらないと回答しており、そろえてもらえなかった者の方が若干多くなっている。

また、「絵本を読んでくれた」「図鑑や美術館に連れて行ってくれた」の2項目は、約半数の者があてはまると回答している。最後に「習いごと（ピアノなど）をさせてくれた」でも、半数の者があてはまると回答している。このことから、半数の者が幼い頃より習い事に通っていることがわかる。

②家庭の文化的環境

次は、家庭環境に関する項目についてみていく。家庭の文化は、家の人の普段の振る舞いについて尋ねた項目である。表から「テレビのニュース番組をみる」「スポーツ中継をみる」「歌番組をみる」「新聞を読む」「パソコンやワープロをする」の5項目は、あてはまると回答される割合が高く、ほとんどの家庭で行われていることがわかる。

他方、「クラシックの音楽をきく」「ピアノをひく」「歴史小説や歴史の本を読む」「文学作品や小説を読む」といった項目については、50%を超える児童があてはまらないと回答しており、多くの家庭で行われていないことがわかる。

次に、児童に対する家の人の働きかけに関する項目についてみていく。まず、学習については、「分からない問題があれば、家の人に教えてもらう」「家で落ち着いて勉強できる」の2項目は、7割を超える者があてはまると回答しており、児童の多くは比較的落ち着いた環境で、家の人の支援を受けながら学習していることがわかる。また、約7割の児童が「家には本がたくさんある」の項目にあてはまると回答していることから、本がたくさんある家庭が比較的多いことがわかる。

次に、生活については、「寝坊しそうなになったら、家の誰かが私を起こしてくれる」の項目に約8割の者があてはまると回答している。このことから、多くの者が朝、家の人からのお世話を受けていることがわかる。

他方、「学校から帰ったときには、家にはいつも大人がいる」については、先の項目よりあてはまると回答した者が65%と少なくなっている。このことから、

表2 幼児期の体験、家庭の文化的環境、学習・生活

	度数	%		
		合計	あてはまる	あてはまらない
幼児期の体験	勉強を教えてくれた	1121	82.2	17.8
	参考書をそろえてくれた	1108	38.3	61.7
	図鑑をそろえてくれた	1113	35.9	64.1
	絵本を讀んでくれた	1107	50.9	49.1
	図書館や美術館に連れて行ってくれた	1110	46.4	53.6
習い事(ピアノなど)をさせてくれた	1109	55.4	44.6	
家庭の文化	テレビのニュース番組をみる	1124	91.6	8.4
	スポーツ中継をみる	1118	71.8	28.2
	歌番組をみる	1116	74.6	25.4
	新聞を読む	1115	77.0	23.0
	パソコンやワープロをする	1118	57.0	43.0
	クラシックの音楽を聴く	1111	20.5	79.5
	ピアノをかく	1110	17.7	82.3
	歴史小説や歴史の本を読む	1109	20.6	79.4
	文学作品や小説を読む	1116	28.1	71.9
	分からない問題があれば、家の人に教えてもらう	1646	79.3	20.7
家の人の働きかけ	家の人に「勉強しなさい」とよく言われる	1633	50.3	49.7
	家で落ち着いて勉強できる	1123	74.1	25.9
	家には本がたくさんある	1643	72.0	28.0
	学校から帰った際には、家にはいつも大人がいる	1639	64.4	35.6
	家族のそばに居ながら、家の誰かが私を助けてくれる	1647	79.9	20.2
家庭での学習	学校の宿題はきちんとやる	1655	89.2	10.8
	学校の授業の予習や復習をする	1647	48.1	51.9
	分からない問題があれば、教科書や参考書で調べる	1643	69.4	30.6
	家の人に言われなくても自分で進んで勉強する	1642	64.4	35.6
	テスト前には計画をたてて勉強する	1640	37.4	62.6
	学校や塾の宿題以外に進んで勉強する	1639	34.9	65.1
	時間を見つけて物語や小説を読む	1643	45.8	54.2
	新聞を読む	1649	47.7	52.3
	毎朝、朝食を食べる	1648	93.6	6.4
	ふだん(月一)朝起き、夜寝たりする時間が決まっている	1637	58.9	41.1
家庭での生活	学校に持っていく物は、前の日にそろえる	1631	79.3	20.7
	家の人と学校や友達の話をよく分かってきている	1639	72.2	27.8
	家の人と、自分のことをよく分かってきている	1639	82.7	17.3
	家の人には私の成績を知っている	1639	91.0	9.0
	私は、親を尊敬している	1634	72.4	27.6

大半の児童は、朝は家の人と一緒に過ごしているものの、帰宅時には一人で過ごしていることが伺える。

③家庭での学習・生活に関する項目

次は、児童の家庭での学習に関する項目についてみていく。まず、「学校の宿題をきちんとする」の項目では、約9割の者があてはまると回答しており、宿題をしっかりとしていることがわかる。また、「分からない問題があれば、教科書や参考書で調べる」「家の人に言われなくても自分で進んで勉強する」の2項目では、6割から7割の者があてはまると回答しており、自主的に学習に取り組んでいる様子が伺える。

他方、「テスト前には計画をたてて勉強する」「学校や塾の宿題以外に進んで勉強する」の2項目は、6割を超える児童があてはまないと回答している。これらの項目からは、児童が、テストのために勉強していない様子や、学校や塾から出される課題に主に取り組んでいる様子が伺える。また、「時間を見つけて物語や小説を読む」「新聞を読む」の2項目については、約半数の者があてはまると回答していた。

次は、児童の家庭での生活に関する項目についてみていく。「毎朝、朝食をたべる」については、約9割のものがあてはまると回答しており、多くの者が朝食を食べていることが分かる。「家の人には、自分のことをよく分かってきている」「家の人には私の成績を知っている」の2項目でも8割を超える者があてはまると回答しており、多くの児童は、家の人に自分が理解してもらっていると感じている様子が伺える。

反対に「家の人とよく学校や友達の話をする」「私は親を尊敬している」については、あてはまると回答された割合の方が、あてはまらないと回答された割合よりも高くなっている。しかし、約3割の者があてはまないと回答していることから、家の人とのコミュニケーションが順調ではない家庭が少なくないことがわかる。特に、「ふだん(月一金)朝起きたり、夜寝たりする時間が決まっている」では、約4割を超える者があてはまないと回答しており、さほど規則正しい生活をおくっていない児童が半数ほどいることが伺える。

4. 学習・生活習慣の構成因子

ここでは、児童の家庭での学習や生活の傾向をよりわかりやすく把握するため、領域ごとに主成分分析を行い、合成変数を作成する。下の表3、表4は、領域ごとの主成分得点を示している。

①家庭での学習

学習に関連する8つの項目について主成分分析(無回転)を行った結果、2つの成分が抽出された。第1成分については、「学校の授業の予習や復習をする」「学校や塾の宿題以外に進んで勉強する」といった項目が見られたため、「家庭での学習」成分と命名した。

第2成分については、「新聞を読む」「時間を見つけて物語や小説を読む」といった家庭での活字とのふれ合いに関する項目がみられ、かつ「学校の宿題をきちんとする」といった項目が負の得点を示していたため「学業以外の文芸への関心」と命名した。

表3 家庭での学習に関連する項目の主成分分析

	成分	
	1 家庭での学習	2 学業以外の文芸への関心
学校の授業の予習や復習をする	0.737	-0.043
学校や塾の宿題以外に進んで勉強する	0.714	0.136
テスト前には計画をたてて勉強する	0.658	0.042
分からない問題があれば、教科書や参考書で調べる	0.655	-0.153
家の人に言われなくても自分で進んで勉強する	0.619	-0.295
学校の宿題はきちんとやる	0.535	-0.479
時間を見つけて物語や小説を読む	0.458	0.548
新聞を読む	0.306	0.640
負荷量の2乗和	2.886	1.071
寄与率(%)	36.075	13.387
累積寄与率(%)	36.075	49.462

②家庭での生活

家庭での生活に関する7項目について主成分分析(無回転)を行った結果、2つの成分が抽出された。第1成分については、「家の人には、自分のことをよく分かってきている」「家の人にはよく学校や友達の話をする」「私は、親を尊敬している」「学校に持ってい

く物は、前の日にそろえる」といった家庭での生活に関する生活がみられたため、「家庭での生活」と命名した。第2成分については、「ふだん(月一金)朝起きたり、夜寝たりする時間が決まっている」「毎朝、朝食を食べる」といったご飯、睡眠に関する項目がみられ、かつ「私は親を尊敬している」「家の人は自分のことをよく分かってきている」といった項目と負の関係を示していたため、「自立的な生活習慣」成分と命名した。

表4 家庭での生活に関連する項目の主成分分析

	成分	
	1 家庭での生活	2 自立的な生活習慣
家の人は、自分のことをよく分かってきている	0.711	-0.381
家の人とよく学校や友だちの話をする	0.648	-0.075
家の人は私の成績を知っている	0.576	-0.156
私は、親を尊敬している	0.642	-0.441
学校に持っていく物は、前の日にそろえる	0.535	0.405
ふだん(月一金)朝起きたり、夜寝たりする時間が決まっている	0.498	0.526
毎朝、朝食を食べる	0.462	0.463
負荷量の2乗和	2.418	1.025
寄与率(%)	34.539	14.649
累積寄与率(%)	34.539	49.188

5. 幼児期の体験、家庭の文化的環境と学習・生活との関係

ここでは、幼児期の体験、家庭の文化的環境の違いによって、児童の学習・生活がどのように異なるのか分析を行う。まずは、幼児期の体験との関係からみていく。

①幼児期の体験と学習・生活

まず「家庭での学習」については、「勉強を教えてくれた」「図鑑をそろえてくれた」「習い事をさせてくれた」といった幼児期の体験を示す6項目全てにおいて、経験があった児童の方で主成分得点の平均値が有意に高く、家庭での学習が順調であることを示していた。また、「学業以外の文芸への関心」では、「図鑑をそろえてくれた」「参考書をそろえてくれた」「図書館や美術館につれていってくれた」といった直接学業に結びついていないような文芸への関心を持たせるような働きかけを経験した児童の方で平均値が有意に高く、関心が高いことを示していた。

次に、「家庭での生活」では、先の「家庭での学習」と同様、幼児体験を示す6項目全てにおいて、経験があった児童の方で平均値が有意に高く、家庭での生活が順調であることを示していた。また、「自立的な生活習慣」では、「図鑑をそろえてくれた」経験がない児童の方で平均値が有意に高くなっており、より自立的な生活を送っていることを示していた。

②家庭の文化的環境と学習・生活

まず、家庭の文化と学習・生活の関係についてみて

表5 幼児期の体験、家庭の文化的環境と学習・生活

		主成分得点の平均値				
		学習		生活		
		家庭での学習	学業以外の文芸への関心	家庭での生活	自立的な生活習慣	
幼児期の体験	勉強を教えてくれた	してくれた 0.05	して欲しかった -0.41	0.10 -0.01	0.07 -0.66	0.01 -0.02
		有意差***				
	図鑑をそろえてくれた	してくれた 0.21	して欲しかった -0.16	0.20 0.01	0.25 -0.24	-0.08 0.06
		有意差***				
	参考書をそろえてくれた	してくれた 0.26	して欲しかった -0.21	0.18 0.03	0.20 -0.22	-0.02 0.03
		有意差***				
	絵本を読んでもらった	してくれた 0.17	して欲しかった -0.24	0.11 0.04	0.25 -0.39	0.00 0.01
		有意差***				
	図書館や美術館につれていってくれた	してくれた 0.25	して欲しかった -0.27	0.24 -0.05	0.27 -0.34	-0.04 0.03
		有意差***				
	習い事(ピアノなど)をさせてくれた	してくれた 0.14	して欲しかった -0.24	0.08 0.08	0.15 -0.33	0.03 -0.02
		有意差***				
家庭の文化	テレビのニュース番組をみる	している 0.01	していない -0.42	0.10 -0.16	-0.03 -0.41	0.00 0.05
		有意差***				
	スポーツ中継をみる	している 0.04	していない -0.20	0.13 -0.05	0.01 -0.24	0.01 -0.02
		有意差***				
	歌番組をみる	している -0.01	していない -0.10	0.11 0.00	-0.02 -0.17	0.01 0.00
		有意差***				
	新聞を読む	している 0.06	していない -0.33	0.21 -0.34	0.00 -0.26	0.05 -0.14
		有意差***				
	クラシックの音楽を聴く	している 0.27	していない -0.11	0.34 0.01	0.21 -0.13	0.07 -0.01
		有意差***				
	ピアノをひく	している 0.23	していない -0.09	0.13 0.07	0.19 -0.11	0.09 -0.01
		有意差***				
歴史小説や歴史の本を読む	している 0.36	していない -0.13	0.40 0.00	0.19 -0.12	0.11 -0.03	
	有意差***					
文学作品や小説を読む	している 0.24	していない -0.14	0.44 -0.05	0.24 -0.18	0.11 -0.04	
	有意差***					
パソコンやワープロをする	している 0.10	していない -0.20	0.20 -0.08	0.08 -0.25	0.06 -0.07	
	有意差***					
家の人の働きかけ	分からない問題があれば、家の人におしえてもらう	できる 0.09	できない -0.34	-0.04 0.14	0.11 -0.42	0.01 0.03
		有意差***				
	家で落ち着いて勉強できる	できる 0.23	できない -0.79	-0.01 0.36	0.18 -0.75	0.04 -0.08
		有意差***				
	家の人に、「勉強しなさい」とよく言われる	ある 0.18	ない 0.18	0.18 -0.18	-0.05 0.05	-0.05 0.05
		有意差***				
	家には本がたくさんある	ある 0.13	ない -0.34	0.08 -0.24	0.14 -0.36	0.03 -0.08
		有意差***				
	学校から帰ったときには、家にはいつも大人がいる	いる 0.10	いない -0.18	0.00 -0.01	0.14 -0.25	0.02 -0.05
		有意差***				
	寝坊しそぞろになったら、家の誰かが私を起こしてくれる	ある 0.02	ない -0.07	-0.03 0.11	0.08 -0.33	-0.02 0.10
		有意差***				

いく。「家庭での学習」では、「歌番組をみる」をのぞいた家庭の文化を示す8項目において、経験があった児童の方で平均値が有意に高く、家庭での学習が順調であることを示していた。また、「学業以外の文芸への関心」についてもほぼ同様の傾向を示していた。

次に、「家庭での生活」は、「家庭での学習」と同じ傾向を示していた。また、「自立的な生活習慣」については、「新聞を読む」「文学作品や小説を読む」「パソコンやワープロをする」といった行為を親が行っている児童の方で平均値が有意に高くなっており、より自立的な生活を送っていることを示していた。

次に、家の人の働きかけと学習・生活の関係についてみていく。「家庭での学習」では、ほとんどの項目において、働きかけがある方で平均値が有意に高くなっており、家庭での学習が順調であることを示して

いた。ただし、「寝坊しそうになったら、家の誰かが私を起こしてくれる」については、有意な差がみられなかった。また、「学業以外の文芸への関心」では、「分からない問題があれば、家の人に教えてもらう」「家で落ち着いて勉強できる」「寝坊しそうになったら、家の誰かが私を起こしてくれる」といった働きかけがない児童の方が平均値が優位に高くなっており、学業以外の文芸の関心が高いことを示していた。次に、「家庭での生活」では、これまでと同様「家庭での学習」とほぼ同様の傾向がみられた。また、「自立的な生活習慣」については、「家には本がたくさんある」と回答している児童の方が有意に平均値が高くなっており、より自立的な生活を送っていることを示していた。

6. 学習・生活習慣の規定要因

これまで、幼児期の体験や文化的な家庭環境の違いによって、児童の学習・生活習慣が異なることを確認した。しかしながら、ここまでの分析だけでは、先の説明変数単独の影響であるかどうかは明らかにされていない。そこで重回帰分析を行い、他の変数の影響力を統制した場合についてそれぞれの変数の影響を検討し、各変数の実質的な影響力を検討する。また、この際、家庭の文化的環境や児童の学習・生活習慣と強い関わりがあると考えられる「性別」「家族構成」といった変数を統制変数として加え、分析を行った。

分析の結果を表6に示す。「自立的な生活習慣」において決定係数が若干低くなっているが、モデルは全て有意である。以下、検定の結果が有意な項目に着目し、検討を行う。

①家庭での学習

まず性別では、「家庭での学習」のみ有意に正の値

を示していた。このことから、女子の方が家庭での学習が順調であることがわかる。次に、幼児体験では、「図書館や美術館に連れて行ってくれた」が小さいながらも有意に正の値を示していた。次に、「家庭の文化」では、「新聞を読む」が有意に正の値を示していた。最後に、「家の人の働きかけ」では、「家で落ち着いて勉強できる」「分からない問題があれば、家の人に教えてもらう」の2項目が特に高い正の標準化係数を有意に示していた。対して、「家の人に『勉強しなさい』とよく言われる」は、有意に負の値を示していた。

②学業以外の文芸への関心

まず「幼児体験」では、「図書館に連れて行ってくれた」が若干の正の値を有意に示していた。対して「絵本を読んでもくれた」「習い事をさせてくれた」の2項目は、若干の負の値を有意に示していた。次に、「家庭の文化」では、「新聞を読む」「文学作品や小説を読む」の2項目が、特に高い正の値を有意に示していた。最後に、「家の人の働きかけ」では、「家の人に『勉強しなさい』とよく言われる」「家には本がたくさんある」は有意に正の値を示していた。対して、「家で落ち着いて勉強できる」「分からない問題があれば、家の人に教えてもらう」「学校から帰ったときには、家にはいつも大人がいる」の3項目が有意に負の値を示していた。

③家庭での生活

まず「幼児体験」では、「絵本を読んでもくれた」「勉強を教えてくれた」の2項目が、有意に比較的高い正の値を示していた。次に、「家庭の文化」では、有意な値は得られなかった。最後に、「家の人の働きかけ」では、「家の人に『勉強しなさい』とよく言われる」を除いた項目が有意に正の値を示していた。

表6 幼児期の体験や家庭の文化的背景と学習・生活の関わり

独立変数	家庭での学習				学業以外の文芸への関心				家庭での生活				自立的な生活習慣					
	B	標準誤差	標準化係数	検定	B	標準誤差	標準化係数	検定	B	標準誤差	標準化係数	検定	B	標準誤差	標準化係数	検定		
(定数)	-2.661	0.231		***	-0.643	0.250		*	-3.632	0.226		***	-0.034	0.276				
性別	女子であること(ダミー)				0.121	0.059	0.059	*	0.004	0.064	0.002		0.012	0.059	0.006			
家族構成	両親と暮らしていない(ダミー)				0.019	0.074	0.007		0.105	0.080	0.040		0.059	0.073	0.022			
	兄弟または姉妹と暮らしていない(ダミー)				-0.079	0.083	-0.026		-0.141	0.089	-0.047		-0.015	0.081	-0.005			
幼児期の体験	勉強を教えてくれた				0.010	0.033	0.009		0.050	0.035	0.046		0.145	0.033	0.129	***		
	図鑑をそろえてくれた				0.046	0.033	0.048		0.016	0.036	0.017		0.044	0.033	0.046			
	参考書をそろえてくれた				0.057	0.033	0.059		0.023	0.035	0.024		-0.005	0.033	-0.006			
	絵本を読んでもくれた				0.013	0.026	0.015		-0.074	0.029	-0.087	**	0.133	0.026	0.156	***		
	図書館や美術館に連れて行ってくれた				0.068	0.029	0.075	*	0.095	0.032	0.196	**	0.047	0.029	0.051			
	習い事(ピアノなど)をさせてくれた				0.038	0.022	0.049	*	-0.056	0.024	-0.074	*	0.047	0.022	0.061	*		
家庭の文化	テレビのニュース番組をみる				0.003	0.041	0.002		-0.023	0.045	-0.017		0.053	0.041	0.039			
	スポーツ中継をみる				0.003	0.031	0.003		0.017	0.034	0.017		-0.016	0.031	-0.015			
	歌番組をみる				-0.009	0.030	-0.009		-0.006	0.033	-0.006		0.026	0.030	0.024			
	新聞を読む				0.099	0.029	0.105	***	0.214	0.031	0.229	***	0.005	0.028	0.005			
	クラシックの音楽を聴く				0.072	0.030	0.070	*	0.036	0.033	0.035		0.053	0.030	0.051			
	ピアノをひく				0.002	0.030	0.002		-0.003	0.033	-0.003		-0.001	0.030	-0.001			
	歴史小説や歴史の本を読む				0.081	0.035	0.079	*	0.044	0.037	0.043		-0.038	0.034	-0.037			
	文学作品や小説を読む				-0.031	0.031	-0.033		0.170	0.034	0.183	***	0.033	0.031	0.035			
	パソコンやタブレットをみる				-0.007	0.024	-0.008		0.031	0.026	0.036		0.037	0.024	0.046			
	分からない問題があれば、家の人に教えてもらう				0.165	0.032	0.147	***	-0.112	0.034	-0.101	**	0.103	0.031	0.092	***		
家で落ち着いて勉強できる				0.343	0.032	0.307	***	-0.202	0.035	-0.184	***	0.315	0.031	0.285	***			
家の人に「勉強しなさい」とよく言われる				-0.175	0.025	-0.192	***	0.158	0.027	0.175	***	-0.073	0.025	-0.080	**			
家には本がたくさんある				0.096	0.030	0.093	**	0.135	0.032	0.133	**	0.087	0.030	0.083	**			
学校から帰った時には、家にはいつも大人がいる				0.061	0.025	0.065	*	-0.083	0.028	-0.090	**	0.097	0.025	0.103	***			
寝坊しそうになったら、家の誰かが私を起こしてくれる				-0.020	0.026	-0.019		-0.034	0.031	-0.034		0.113	0.028	0.112	***			
				adjR ²		0.375	***	adjR ²		0.245	***	adjR ²		0.390	***	adjR ²		0.015

④自立な生活習慣

本成分では、「家の人の働きかけ」のうち、「学校から帰ったときには、家にはいつも大人がいる」という項目のみ有意に正の値を示していた。

以上の分析から次のことがいえる。まず学習習慣のうち、「家庭での学習」は、家の人の関わりが強く、また高級文化に属する家庭の文化であるほど順調であると言える。また、「学業以外の文芸への関心」は、家の人が新聞や文学作品、小説等に興味関心をもち、児童が幼児の時に図書館等に連れていきつつも、現在、学習、生活両面への関わりが少ない家庭ほど高いと言える。

次に、生活習慣のうち「家庭での生活」は、現在での児童との関わりも強い関係を持っているが、幼児期に勉強を教えることや絵本を読むことを通して培った関わりがあるほど、より順調と言える。また、「自立な生活習慣」は、学校から児童が帰った後のコミュニケーションが大切であるといえよう。

7. 結論

以上のように本論文では、児童の学習・生活と、彼らの幼児期の体験や家庭の文化的環境との関係について分析を行った。本論文の知見を整理すると、以下の3点になる。

第1に幼児期の体験が児童の学習・生活に与える影響は、家庭の文化的環境と比べて小さいということである。ただし、勉強を教えてもらった、絵本を読んでもらったといった体験は、家庭での生活をより順調にしている。このことから、幼児の頃の勉強や本を介しての親との関わりが、今の児童と親の関係をつくる基礎、生活の基礎になっていると思われる。また、図書館へ連れて行ってもらった経験は、家庭での学習や学業以外の文芸への関心を持つ基礎にもなっていた。

第2に、家庭の文化では、新聞を読むことが、児童の家庭での学習や学業以外の面での文芸への関心を順調にすることについて有効であった。このことから、家の人が文字に親しんでいることが、子どもが文字に親しむ一因になっていると考えられる。また、家の人の働きかけでは、学習・生活両面での児童に対するサポートが、特に児童の家庭での学習や生活に影響を与える強い要因になっていた。

第3に、家族構成がさほど関わりを持たなかったことである。例えば、この結果は、父親、母親と一緒に生活していなかったとしても、児童に対する学習・生活両面に対する働きかけさえあれば、児童の学習、生

活は順調になるということを示しているとも考えられる。しかし、本分析では、父親、母親とそれぞれ一緒に暮らしているのかどうかを尋ねた項目を使用しているため、本当に父親もしくは母親がいないのか、それともどちらかが単身赴任しているかは不明である。そのため、家族構成の影響を正確に描きだせていない可能性がある。従って、結論は留保したい。

以上の3点の知見からは、児童の学習・生活をより順調にするためには、今、児童一人ひとりにしっかりと関わるのが最も重要であるといえよう。最後に本論文の課題を述べる。本分析では、幼児期の体験の項目が、学習や文化の側面のみを問い、限定的であった。このことは、自立な生活習慣について幼児期の体験が有意でなかった理由とも考えられる。今後は、生活面での幼児期の体験も加え、分析を行う必要がある。

【参考文献】

- 池田寛 (2000) 『学力と自己概念』解放出版社。
- 荻谷剛彦・志水宏吉編 (2004) 『学力の社会学—調査が示す学力の変化と学習の課題』岩波書房。
- 富永健一 (1979) 『日本の階層構造』東京大学出版会。
- 21世紀 COE プログラム東京大学大学院教育学研究科基礎学力研究開発センター編 (2006) 『日本の教育と基礎学力—危機の構図と改革への展望』明石書店。
- 原純輔・盛山和夫 (1999) 『社会階層 豊かさの中の不平等』東京大学出版会。
- 原田彰編著 (2003) 『学力問題へのアプローチ—マイノリティと階層の視点から』多賀出版。
- ブルデュー, P.・パスロン, J. C. 宮島喬訳 (1991) 『再生産』藤原書店。(Bourdieu, P. and Passeron, J. C., 1970, *La reproduction: elements pour une theorie du systeme d'enseignement*, Minit).
- ボウルズ, S.・ギンタス, H. 宇沢弘文訳 (1986) 『アメリカ資本主義と学校教育：教育改革と経済制度の矛盾』岩波書店 (Bowles, S. and Gintis, H., 1976, *Schooling in Capitalist America: Educational Reform and the Contradictions of Economic Life*, Basic Books.)。
- 水野考 (2006) 「児童生徒の家庭での学習と生活—その実態と学力に及ぼす影響」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第三部, 広島大学大学院教育学研究科第55号 169~176頁。
- 耳塚寛明 (2007) 「小学校学力格差に挑む だれが学力を獲得するのか」『教育社会学研究』第80集 23~39頁 東洋館出版社。
- 宮島喬・藤田英典 (1991) 『文化と社会』有信堂。

安田三郎 (1971) 『社会移動の研究』 東京大学出版会。
Bernstein, B. 1971, *Class, Code and Control*, Vol.1,
Routledge & Kegan Paul.
Blau, P. M. and Otis D. D., 1967, *The American
Occupational Structure*, Wiley.
Coleman, J. S., et al. 1966, *Equality of Educational*

Opportunity, U. S. Government Printing Office.
Coleman, J. S., Thomas, H., and Sally, K., 1982, *High
School Achievement: Public, Catholic, and Private
Schools Compared*, Basic Books.
Edmonds, R. R., 1979, "Effective School for the Urban
Poor", *Educational Leadership*, Vol.37(1), pp.15-24.